

遊戯王ARC—V もしも、あの時

卯月アキ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

皆さん、初めまして。

遊戯王ARC―Vのラストは何であの結末になったのか？そんな事をもんもんと考えて（妄想して）いたらいつの間にか出来ていました。アニメにある程度沿った、また別の世界の遊戯王ARC―Vとなっています。設定とかキャラデザとか、デツキテーマとか良いところはあるんですよARC―V。

後々アニメとは違う話になっていきますが、最初の方はアニメと同じ。なのである程度すっ飛ばしたダイジェスト&デュエル構成の練習みたいな感じになっています。説明とかもアニメ見てる前提で書いてないところがあつたり。

勢いとノリで書いてる。

拙いですが、楽しんで貰えれば幸い。

さあ、お楽しみはこれからだ！

## 目次

第1話	デュエルの新たなステージ！ペンデュラム召喚！	1
第2話	おかしなおっかけ？融合玩具使いの弟子入り志願！	20

# 第1話 デュエルの新たなステージ！ペンデュラム 召喚！

アクションデュエル。

それは、新しく進化したデュエル。

ーモンスターと共に、地を蹴り、宙を舞い、フィールド内を駆け巡るー

デュエリストが信じ組み上げたデッキの他に、デュエル開始時にフィールド内に撒かれる“アクション・カード”。デュエリスト自身も知り得ない要素を取り入れる事で、誰もが予想できないデュエルを可能にする。

リアルソリッドビジョンシステムを駆使し、モンスターだけだなくデュエリスト自身も動くアクションデュエルはまさに、観客に“魅せる”ショーなのだ。

『やい！卑怯者の息子！』

違う。

『負けるのが怖くて、逃げたんだろ。お前もそうするんだろう？』

父さんは、逃げてなんかいない。

『あいつは決闘者の面汚しだよ。』

父さんは、最高の、エンタメデュエリストだ！

遊矢「それを今ここで、俺がアンタに勝って証明する！」

これは、神さまがくれたチャンスだ。

あの日……父さんへ神 遊勝がなくなった日から、もう3年。世間は未だ父さんの事は“チャンピオンの座を失いたくなくて、逃げた決闘者”となっている。

けど、俺はそんなの認めない。

俺が憧れた父さんは、観客も対戦相手も皆、笑顔にするようなデュエルをする、エンタメデュエリスト。そんな父さんが訳もなく、防衛

戦を棄権するハズがない。きっと何かしらの理由がある。第一、この3年間、家族である俺や母さん、友人であり良きライバルそして今はプロを引退し塾を経営している〈修造〉のもとにだって現れていないんだ。

遊矢「魔法カード《ワンダーバルーン》、《バーバリアン・キング》の攻撃力を0にする！……これで、ワンショットキルが成立！」

バトル！——《オッドアイズ・ドラゴン》の攻撃が通れば

石島「っ。アクション・マジック《奇跡》を発動！」

遊矢「なっ!？」

石島「そして、永続罫《バーバリアン・レイジ》を発動。《ワンダーバルーン》の効果も切れる。これで、《バーバリアン・キング》の攻撃力は5000！さあ、俺のターン！」

通らない攻撃。乗り越えるべき壁は、今の俺なんかじゃ超えられない程、高く。

石島「バトル。《バーバリアン・キング》、」

頼みのエース《オッドアイズ・ドラゴン》は手札に戻された。俺の場に逆転できるようなカードは、無い。

石島「速攻魔法《バーバリアンの奇術》、」

石島LP3750↓4000

俺が全力で削ったはずの相手ライフは回復され、初期ライフである4000に戻ってしまった。対する俺のライフは僅か400。

石島「サレンダーするか？親父のように尻尾を巻いて！」

手札にあるのは《星読みの魔術師》、《EMソード・フィッシュ》、《EMウィップ・ヴァイパー》、《オッドアイズ・ドラゴン》。

モンスターしかないこの状況。どのモンスターも《バーバリアン・キング》の攻撃力には遠く及ばない。対抗手段は、ない。

遊矢「やっぱり、俺じゃあ、駄目なんだ。俺なんかじゃあ……」

——

遊矢は俯く。この絶望的な状況、自らの勝ち筋などないと心が折れてしまったようで。俯くと、首からぶら下げていたキラリと輝く振り子（ペンデュラム）が彼の目に入る。今はいない、父親から貰った、大

切なもの。

遊勝『笑顔だ。遊矢。泣きたい時は、笑え。笑っていれば、そのうち楽しくなってくる。それが次のエネルギーになる。怖がって縮こまっていたら、何もできない。勝ちたいなら、』

遊矢「勇気を持つて、前に出る……。」

遊矢「そうだ。そうだよな、父さん。」

父との思い出を、振り子を見て思い起こす。過去、父に励まされたあの時の言葉。その言葉で遊矢は自らを奮い立たせる。彼は前を見据える。一握りの奇跡に賭け、デツキトップに手を伸ばし、ドローをする。

遊矢「揺れる、ペンデュラム！大きく、もっと大きく！ドローっ！」  
ドローカードは、『時読みの魔術師』……何の変哲もない、この状況を打開する事の出来ないカード、その『はずだった』。

遊矢がドローすると同時、振り子が大きく揺れ、光が放たれる。『星読みの魔術師』、『時読みの魔術師』、『オッドアイズ・ドラゴン』。それらのカードも、まばゆき光を放つ。

ーそして、カードの情報が『書き変わる』。ー  
新たな、召喚方法へと、繋がる。

遊矢「俺は、スケール1の『星読みの魔術師』とスケール8の『時読みの魔術師』で、ペンデュラムスケールをセッティング！」

この世界にはそれまで、存在しないハズのもの。だが、デュエルディスクには、始めからその召喚法があったかのようにとあるゾーンが存在している。

遊矢「これで、レベル2から7までのモンスターが同時に召喚可能！揺れる、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！」

ペンデュラム召喚！と彼は叫ぶ。観客も、対戦相手も、呆気にとられたただ彼の行動を見つめる。

遊矢「出でよ。我がしもべのモンスター達よ！」

現れたのは、『EMウィップ・ヴァイパー』、『EMソード・フィッシュ』そして……『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン』。

石島「何だと、。複数のモンスター召喚、しかも上級モンスターも

リリース無しで召喚？出来るわけがない！」

だが、しかし。反応するはずの、システムエラーを報せる警報は沈黙しており。

石島「システムエラーが起きない……。召喚は、有効だと!？」

遊矢「《EMウィップ・ヴァイパー》、《EMソード・フィッシュ》の効果発動！」

石島「くっ。《バーバリアン・キング》の攻撃力が!」

遊矢「バトルだ! 《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》、《バーバリアン・キング》を攻撃!」

石島「罨発動《バーバリアン・ハウリング》!」

遊矢「無駄だ! 時空を見定める《時読みの魔術師》よ! その精緻なる力で我を守護せよ! インバース・ギアウイス!」

石島「つく……。見つけた! ならばアクション・マジック《回避》……」

遊矢「天空を見定める《星読みの魔術師》よ。その深淵なる力である。敵を封じよ! ホロスコープディベネイション!」

石島「!!」

遊矢「今だ、オッドアイズよ! その二色の眼で、捉えた全てを焼き払え! 螺旋のストライクバースト!」

石島「だが、俺のライフはまだ、」

遊矢「《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の効果。モンスターと戦闘を行う場合、このカードが相手に与える戦闘ダメージは倍となる! リアクション・フォース!」

石島「に、2倍だあ!？」

遊矢「これで、ジ・エンドだ!」

遊矢WIN!

観客は何か起こったのか頭で理解出来ていないようで。本来あるはずの歓声は、皆呆けてしまったためかまったく聞かない。それもそのはず。まだジュニアユースの選手、有名でも何でもない、ただ「元チャンピオンへ榊 遊勝」の息子である者が現チャンピオンの「ヘストロング石島」を破った。誰も、見た事のない召喚法を使って。

ニコ「……ブラボー！エクセレント！コングラッチュレエー  
ションツ!!」

ようやく、状況を飲み込んだMCのアナウンスによって、抑えられ  
ていた歓声が響き渡る。

――

とあるビルの1室。ソリッドビジョンによって、舞網市全体の地  
図、何かを示すリーダーチャートや円グラフが映し出されている。カタ  
カタと何名かのオペレーターが作業している音だけがある空間。

突如、けたたましいブザーが鳴り響く。

「市内臨海地区にて高レベルの召喚反応を確認！」

「解析結果……出ます！召喚形式、ペンデュラムです！」

オペレーターは驚愕の感情をのせ、報告する。

室内を見渡せるように高く設置された管制部分。そこには2人の  
男性がいた。赤いマフラーを着けメガネをかけた、大物の雰囲気を漂  
わせる人物と、黒服にサングラス、如何にも側近と言わんばかりの人  
物が。

赤マフラー「……付近で、行われているデュエルは？」

黒服「社長。アクションデュエルチャンピオンであるストロング石  
島と榊 遊矢によるエキシビジョンマッチが行われています。……  
!？」

社長、と呼ばれた人物は冷静に、だがどこか動揺しているように黒  
服へと問いかける。

黒服は手元にあるタブレットで、彼の問の答えを調べる。答を淡々  
と述べる黒服の男。そんな彼に驚きの色があらわれる。

社長「どうした。中島？」

中島「榊 遊矢がストロング石島に勝利したと。しかも、未知の召  
喚方法を使つて。」

ほう。と社長は眉をひそめる。現アクションデュエルチャンピオ  
ンへストロング石島。その実力はチャンピオンの座を手に入れてか  
ら3年間、その座を守り続けてきたという事実から容易に想像でき  
る。

社長「榊 遊矢が？彼についての情報を。」

中島「市内にある遊勝塾に在籍、クラスはジュニアユース。そして、あの榊 遊勝の息子です。」

社長は、中島に提示されたタブレットの画面を見つめる。

そこに映るのはへ榊 遊矢のデュエルの対戦履歴。その人物がどのようなデッキを使用したか、相手は誰でいつ対戦したのか。そのような事が全て記録されているものだ。

社長「公式戦での勝率は5割程度、か。」【記録を見る限り、至って普通の中学生だ。デュエルの実力も突出している訳ではない。強いて言うなら「彼」の息子であるというくらいか。】

中島「社長……？」

社長「彼の監視をしろ。何かあれば、どんな些細なことでも良い。私に報告するんだ。」

中島「了解です。」

社長【ペンデュラム……私の知らない、召喚法を操る者、か。】

|| || ||

ー ストロング石島戦の翌日ー

ここは「遊勝塾」。

舞網市において、デュエルとは塾で習うもの。塾に通う事で、デュエルのルール、理論等を学ぶ。どの塾に通うかで、自身のデュエルススタイルが変わっていく。だから、デュエリスト達は自分の塾はどんな特徴を持っているのか、あそこの塾ではどんな事を教えているのか、そんな情報を敏感に察知する。

「遊勝塾」は、アクションデュエル……いやエンタメデュエルに重きを置く塾である。がその他の部分にはあまり力を入れていないためか、それともこの塾の創始者の評判のせいなのか、繁盛しているとは言い難い状況だ。けれども、

柚子「はいはい、押さないで下さいー！入塾希望者の方はコチラの書類にお名前をご記入下さいー！」

ワイワイガヤガヤ。

先日のへストロング石島とのエキシビジョンマッチ。遊矢は見事

な勝利を収める事ができた。そのため、彼の通う「遊勝塾」の名前は突如として世間に広まる事となる。この街で一番有名であり、最も多くの「召喚法」を教える「LDS（レオ・デュエル・スクール）」。ここでも扱っていない「ペンデュラム召喚」を指導しているらしい、塾として。

アユ「凄いね！柚子お姉ちゃん。」

フトシ「入塾希望者がこんなに……しびれるう〜！」

柚子「これでやっつと、赤字から脱却出来る……！」

元々、この塾に通っていた2人の子供、アユとフトシはこれから後輩が増えるという事、この塾の仲間が増えるであろう事に思いを馳せ、興奮した様子で。塾長の娘である柚子は、今までの厳しい経営の状況が好転するという喜びを噛み締めている。

柚子「今、入塾を希望されるなら！あのストロング石島を破った我が塾のエース、榊 遊矢によるデュエルを観戦する事ができます！」  
入塾希望者の達からおお！と声があがる。

やはり皆、噂の「ペンデュラム召喚」というものをこの目で見てみたいようだ。

アユ「誰が遊矢お兄ちゃんの相手をするの？柚子お姉ちゃん。」

フトシ「昇兄ちゃんじゃないのか？」

柚子「権現坂は別の塾所属だから駄目なのよ。だから今日は私が、遊矢の相手をするわ！」

遊矢「柚子！塾長がデュエルの準備できたって。」

柚子「ええ！もう？まだデュッキの調整してないのに〜!!」

遊矢「いいからいいから！早くやろうぜ、柚子。お客さんを待たせる訳にもいかないしね。……！皆さん！今日は私のワンマンショーへようこそ！」

柚子「遊矢だけじゃないのよ！デュエルは1人でできないでしょう!? ああもう分かったから！デュエル場へ行くわよ。」

グイグイと遊矢の背を押す柚子。2人はデュエル場へと向かう。

柚子「お父さん！こっちの準備できたわ！」

修造『よし。じゃあ行くぞ！アクション・フィールド、セット！』

デュエル場で相対する柚子と遊矢。天井は高く、周りに、2人以外の物、人はない空間。塾長へ柎 修造の合図が壁面に埋め込まれたスピーカーから響く。

システム音『フィールド魔法、《ブレイン・ブレイン》』

遊矢「戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が、」

柚子「モンスターと共に、地を蹴り、宙を舞い、」

遊矢「フィールド内を駆け巡る！」

柚子「見よ！これぞデュエルの最強進化系、」

遊矢「アクション〜」

遊矢&柚子「デュエル！」

遊矢 LP 4000 VS 柚子 LP 4000

システム音が鳴る。すると2人以外何もないはずのデュエル場が、突如として草原となる。小川が流れ、中央部分と思しき所にはちよつとした広場がある。壁があるはずの所には青空が広がっており。どこからともなく爽やかな風が吹いてくるのではないかと、錯覚してしまう程。

これこそ、リアルソリッドビジョンシステム。そこにあるはずのないものを、質量までも持って再現する技術。

――

柚子「私のターン。《幻奏の歌姫ソロ》を召喚！カードを1枚伏せて、ターンエンドよ。」

幻奏の歌姫ソロ ATK1600

柚子のちようど正面から、美しい歌声が響き渡る。そこに現れた女性のモンスター。更に、大きく投影されたカードが、モンスターの後ろに裏側で1枚置かれる。

遊矢「俺のターン！ドロー！」

柚子「遊矢、ペンデュラム召喚、やってくれるわよね。」

遊矢「うーん。今の手札にはオッドアイズしかないからペンデュラム召喚出来ないんだよね？さっきテレビで確認した時は、こんな見た目のカードを2枚使ってたし。なら。」

遊矢「俺は、《EMウィップ・ヴァイパー》を召喚！」

EMウィップ・ヴァイパー ATK1700

出てきたのは、ムチのようにしなやかな身体を持つヘビ。鎌首をもたげ、相手を威嚇をする。その首には蝶ネクタイ、頭にはシルクハットを被っており、尻尾には持ち手らしき装飾。シャーとひと鳴きし終えると、遊矢の右腕に巻き付く。

遊矢「《EMウィップ・ヴァイパー》の効果！1ターンに1度、表側表示のモンスター1体の攻撃力・守備力を入れ替える。」

ソロ ATK1600↓1000

《EMウィップ・ヴァイパー》の巻き付いた右腕を《幻奏の歌姫ソロ》に向ける。すると、《EMウィップ・ヴァイパー》は《幻奏の歌姫ソロ》へと勢いよく飛び出してゆく。

遊矢「さあ、バトルだ！《EMウィップ・ヴァイパー》、《幻奏の歌姫ソロ》に攻撃！」

柚子 LP4000↓3300

柚子「《幻奏の歌姫ソロ》の効果！このカードが戦闘で破壊された時、デッキから新たな《幻奏》モンスターを呼び出す事ができるわ。来て！《幻奏の音女ソナタ》！」「えっ。ペンデュラム召喚しないの!?!ど、どうしよう。」

幻奏の音女ソナタ ATK1200

破壊された《幻奏の歌姫ソロ》は光の粒子となって消えてしまう。だが、残った光の粒子は別のモンスターのカタチを創ってゆく。光の中から、新たな歌声が響く。

柚子「《幻奏の音女ソナタ》の効果。特殊召喚したこのカードがフィールドに存在する限り、自分フィールド上の天使族モンスターを強化！」

ソナタ ATK1200↓1700

遊矢「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド。」

観客一同「ええ……。ペンデュラム召喚は〜?」

遊矢「まあまあ。皆さん落ち着いて。次のターン、お見せしますよ！」

柚子「その言葉信じていいんでしょうね……。?」

遊矢「だ、大丈夫だって！柚子！それより、このデュエルをもっと盛り上げよう！」

柚子「もう…。私のターン、ドロー。」

柚子「私は伏せていたカードを発動するわ！永続罫《リビングデッドの呼び声》。墓地の《幻奏の歌姫ソロ》を特殊召喚！」〔盛り上げる、か。…。それなら。〕

ソロ ATK1600↓2100

遊矢「おおっと！それなら、《EMウィップ・ヴァイパー》の効果が発動。対象は、《幻奏の歌姫ソロ》！」

ソロ ATK2100↓1500

柚子「ふふつ、それは読めていたわ！私は《幻奏の歌姫ソロ》と《幻奏の音女ソナタ》リリースし、アドバンス召喚！天上に響く妙なる調べよ。眠れる天才を呼び覚ませ。いでよ！レベル8《幻奏の音姫プロデジー・モーツアルト》！」

幻奏の歌姫プロデジー・モーツアルト ATK2600

2体のモンスターが歌う。2つの歌声は、重なり、共鳴し、新たなモンスターを呼び起こす。

スッ。2体のモンスターは消える。代わりに現れるのは琴のような羽、手には指揮棒を持つ、女型のモンスター。

柚子「《幻奏の歌姫プロデジー・モーツアルト》の効果！1ターンに1度、手札から天使族・光属性のモンスター1体を特殊召喚できる！出番よ《幻奏の音女オペラ》！」

幻奏の音女オペラ ATK2300

《幻奏の歌姫プロデジー・モーツアルト》がすい、と指揮棒を振り始める。指揮棒を振るごとに光で作られた楽譜が宙に浮かぶ。楽譜が一際強く輝くと、そこに新たなモンスターが現れる。

遊矢「いいね、盛り上がってきたよ！」

柚子「バトル！《幻奏の音女オペラ》で《EMウィップ・ヴァイパー》に攻撃よ！」

遊矢「くう…。」

遊矢LP4000↓3400

柚子「《幻奏の歌姫プロデイジー・モーツァルト》！遊矢にダイレクトアタック！グレイスフル・ウエーブ！」

柚子の合図と共に、《幻奏の歌姫プロデイジー・モーツァルト》は遊矢に向かい攻撃体制をとる。

琴のような羽が開かれる。そして、羽に模様が、鍵盤の模様が浮かびあがる。《幻奏の歌姫プロデイジー・モーツァルト》は歌い始める。その歌は、声は、指向性を持つ衝撃波となって遊矢に襲いかかる。ドカン！フィールドに土埃が舞う。

柚子「さあ、これでああなたのライフは残り僅か。覆せるものなら覆してご覧なさい！………ってライフが減っていない!？」

遊矢「俺は罫カード《EMコール》を発動していたのさ！」

柚子「何ですって!？」

柚子は勝ち誇った声で叫ぶ。

目の前にはもくもくと舞う土埃。だが、ライフが減った事を示す音声は一向に流れず。その事実に困惑し、動揺を隠せない柚子。そして、それに答える遊矢の得意げな声。

少し時間が経つと、土埃が晴れ。

柚子の目線の先、その辺り地面は抉れている。が遊矢の周辺のみ傷1つない状況であった。

遊矢「《EMコール》の効果は、相手の直接攻撃宣言時、その直接攻撃を無効にする！さらに！守備力の合計が直接攻撃してきたモンスター1体の攻撃力の数値以下の《EM》モンスター2体までを手札に加えられる！」

EMソードフィッシュ、EMセカンドンキーを選択

柚子「手札増強……！」

遊矢「そして、速攻魔法《イリュージョン・バルーン》を発動する！」

まだまだこれからだ！そんな気持ちを含めたように腕を振り上げる遊矢。突如、遊矢の周りに5つ、風船（バルーン）が出現する。

遊矢「自分のデッキトップから5枚、カードをめくり、その中から《EM》モンスター1体を特殊召喚できる！」

柚子「でも、その5枚の中に《EM》モンスターがいなかったら、その効果に意味は無いわ!」

遊矢「それはどうかな? さあ、運命のドローだ! 1枚目、罨カード《ドタキャン》。……ハズレだ。2枚目、魔法カード《ツイインツイスカバー・ヒツポ》。当たりだけど、今コイツを出してもなあ。4枚目、罨カード《EMリバイバル》。うーん、今日は運が悪いのかな? 最後! 5枚目……よっし、大当たりだ! 《EMロングフォーン・ブル》! 俺は《EMロングフォーン・ブル》を選択して、特殊召喚する!」

EMロングフォーン・ブル ATK1600

遊矢がドローする毎に風船が割れてゆく。

5つの風船の内2つに、デフォルメされたシルクハットを被ったカバト、同じくデフォルメされた、角の代わりに古い電話の受話器のような物がついた牛が出てくる。どちらも首周りに可愛らしい蝶ネクタイをつけ、片方の目元の部分に星の模様がついている。遊矢はその2匹の内、牛の方に手を伸ばす。途端、デフォルメされていた牛は大きくなってゆく。本来の大きさに戻った《EMロングフォーン・ブル》が遊矢のフィールドへと現れる。

柚子「当ててきたわね!」

遊矢「特殊召喚された、《EMロングフォーン・ブル》の効果発動! デッキから好きな《EM》モンスター1体を手札に加えるよ!」

EMハンマーマンモを選択

柚子「使ったはずの手札が回復した……。カードを1枚伏せてターン、エンド。」

悔しそうに、でもどこか楽しいそうに、柚子は笑い自身のターンを終える。

遊矢「俺のターン、ドロー!」

ドローしたカードをチラッと確認する遊矢。

ドローしたカードは《時読みの魔術師》。今まで出てきたモンスター達とは少しだけ異なるカード。

遊矢「来た!……チエックしたようにやれば、大丈夫!」「レディー

スエーンジエントルメン！お楽しみは、これからだ！」

観客一同「ペンデュラム！ペンデュラム！」

チャンピオンとのバトルの時に、遊矢が使ったセリフ。いよいよ、噂のものをこの目で見られる！と、観客の期待は最高潮に達する。

柚子「来るっ！」

柚子は身構える。1度見た事があるとはいえ、こうして目の前で、デュエル内で改めて出されるのは、やはり緊張するようだ。

遊矢「俺は、スケール4の《オツドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》とスケール8の《時読みの魔術師》でペンデュラムスケールをセツティング！」

デュエルディスクに“PENDULUM”の文字が浮かびあがる。テレビで見た通りだ、と遊矢から喜びの笑みが溢れる。

遊矢「いくぞ！ペンデュラム召喚！」

—————

遊矢「えっ……。」

4枚のモンスターカードを掲げ、勢いよくフィールドにセットする。同時に何体ものモンスターが、上級でさえもリリースなしに、召喚する……ハズだが。現実にあるのはデュエルディスクから鳴るエラー音のみ。試しに繰り返し同じ動作を試みるが、デュエルディスクは同じエラー音を返すのみ。

おかしい、と遊矢は呟く。

柚子「遊矢！どうしたの!？」

どうしよう。遊矢は驚愕の表情を浮かべ。何故デュエルディスクは反応しないのか、どうしてだ？そんな顔。……固まっているのを訝しんだ柚子が声をかけてくるが、遊矢は全く反応できない。予想し得ない自体にどう対処すればいいのか、彼は完全にパニック状態に陥っていたように。

遊矢「どうしようどうしよう。なんで、なんで、できないんだ!？」

柚子「遊矢ー？ゆうやあー!？」

観客一同「おい……どうなってるんだ?！」

観客達も突然止まってしまった状況に困惑している。待望の

ンデユラム召喚”を見れると思っいたら、実際はエラー音が鳴るのみ。何が起こっているんだ？とざわめきが広がる。

遊矢「……まさか。ピンチにならないと使えない、とかか？いや、そうできつとそうだ。だって必殺技はピンチで発動する。なら！」

遊矢「俺は、魔法カード《EMキャスト・チエンジ》を発動する！《EMハンマーマンモ》、《EMフレンドンキー》を見せ、デッキに戻してシャッフル。そして戻したモンスターの数＋1枚だけドロ―だ！」  
言うやいなやフィールドを駆け出す遊矢。

遊矢と共に、《EMロングフォーン・ブル》もドテドテと走りだす。

柚子「ちよつ！待ちなさい、遊矢く!!」

遊矢「ふふん。俺は《EMソード・フィッシュ》を召喚。効果発動！」

EMソード・フィッシュ ATK600

遊矢を追いかける柚子。そんな柚子の進む道に、

剣のような物が大量に突き刺さり柚子の行く手を阻む。剣のような物……それは頭部に鋭い突起を持つ細長い魚。サングラスをかけ、頭部の突起は黒いためかどことなくリーゼントに見える、いかにも不良だ！といったフォルム。

遊矢「相手フィールドのモンスターの攻撃力・守備力を600、下げろ！」

モーツアルト ATK2600↓2000

オペラ ATK2300↓1700

最初は、キョロキョロと辺りを見渡しながら走っていた遊矢。だが、あるものを見つけるとそれに向かって一直線に。

遊矢「アクションカード見つけ！バトルだ！《EMロングフォーン・ブル》、《幻奏の音女オペラ》に攻撃！」

柚子「攻撃力の低いモンスターでバトル？……いいえ、アクションカードね!？」

遊矢「その通り！アクション・マジック《パワーライズ》！俺のモンスター1体の攻撃力をこのターンの間アップ！」

ロングフォーン・ブル ATK1600↓2600

柚子「くっ…！でもなんでオペラに攻撃したの？」

柚子 LP3300↓2400

柚子の疑問は当然だ。《幻奏の歌姫プロデイジー・モーツァルト》は柚子のエースモンスター、強力な効果を持つている。このターンで彼女を倒し切る事が出来ないのは明確。ならば、後々厄介となる方を攻撃した方が良いに決まっている。

遊矢「俺はカードを2枚伏せて、ターンエンド！柚子！全力で俺に攻撃しろ！」

柚子「速攻魔法《サイクロン》、発動。あなたの伏せたカード、1枚破壊させてもらおうわ！……ってええ!!」

遊矢「っ。《エンタメ・フラッシュ》が！」【よし。いい感じに追い詰められている！】

ロングフォーン・ブル ATK2600↓1600

柚子「……よく分からないけど。そう言うのなら全力でいくわ！ドロー！」

遊矢の頼みをひとまず聞くことに決めた柚子。柚子は遊矢を追うのをやめ、他の場所へと駆け出す。

柚子「よし。《幻奏の音女ソロ》を通常召喚。さらに、私は《幻奏の歌姫プロデイジー・モーツァルト》の効果発動。《幻奏の音女エレジー》を手札から特殊召喚！特殊召喚されたエレジーは、私のワールドの天使族モンスターの攻撃力をアップさせるわ！」

幻奏の音女エレジー ATK2000↓2300

モーツァルト ATK2000↓2300

ソロ ATK1600↓1900

自らの場を整えてゆく柚子。この状況、そう簡単に崩すことは出来ない。柚子は、この場を更に盤石にするため、走る。

柚子「見つけた！アクション・カード！」

遊矢「!!」【さあ、どう出てくる?】

柚子「まずは、その邪魔な牛と魚に退場してもらおうわ。バトル！《幻奏の音女ソロ》で《EMロングフォーン・ブル》に攻撃！」

遊矢「っう！」

遊矢LP3400↓3100

遊矢「罨カード! 《EMリバイバル》!」

柚子「させないわ! アクション・マジック 《トラップ・イレイサー》! 罨カードの発動を無効にして、デツキに戻す!」

遊矢「くっ! だけど、これで!」

柚子「さあ、《幻奏の音女エレジー》! 《EMソード・フィッシュ》に攻撃!」

遊矢「ぐあっ!」

遊矢 LP3100↓1800

柚子「ちよつと!? これ本当に大丈夫なの!」

ここで、《幻奏の歌姫プロデイジー・モーツアルト》でダイレクトアタックをすれば、遊矢の負け。

遊矢の場にはもう、抵抗出来るカードは残っていないように思える。

遊矢「柚子!!」

柚子「つく! どうなっても知らないわよ! 《幻奏の歌姫プロデイジー・モーツアルト》でダイレクトアタック!」

大丈夫に見えない! 柚子の表情はまさにそれを反映しており。けれども遊矢は柚子に攻撃を催促してくる。半ばヤケクソで、柚子は攻撃宣言を行う。

遊矢「来た! さあ、今だペンデュラム召喚!」

遊矢は手札に残った最後のモンスターカードを掲げ、ディスクにセツトする。が、

――ERROR――

遊矢「へっ!」

柚子「グレイスフル・ウエーブ!」

遊矢「ウツソだろお!?! うわあああああつ!」

遊矢LP1800↓0

柚子WIN!

柚子&観客「「ええ!」」

結局、遊矢は最後何も抵抗する事なく。

デュエルは終了したのだった。

ーーーー

バチンッ!

軽快な音が鳴り響く。ここは先程デュエルしていたデュエル場ではない。観客達が観戦していた部屋である。

柚子「ちよつと遊矢! どういう事なの!？」

遊矢「ったあ……。そんなの、俺だって知りたいよ!」

柚子はデュエル終了後、もはや相棒と言つてもいい程に手に馴染んでいるハリセンで遊矢を叩く。

遊矢「どうして……。ちやんとテレビで観た通りやったのに……。」

ヒリヒリと痛む後頭部をさすりながら、遊矢は俯き、自身のデッキを、カードを見つめる。

柚子「……。ねえ遊矢。ちよつとそのカード、見せて。」

柚子が遊矢の見つめているカードを見て、気づく。彼が見つめているカードは、《時読みの魔術師》。そのモンスターカードは、彼女の知っているモンスターカードと違う点があった。

まず1つ目、効果欄が2つ存在する。

そして2つ目、2つある効果欄のうち、上部分にある効果欄の両端に8という数字が書かれている。

最後3つ目、カードの下部分が魔法カードであることを示す、緑色となっている。

柚子「遊矢……。これ、何?」

遊矢「ああ、《ペンデュラムカード》って、勝手に呼んでる。」

柚子「もしかして、これが、《ペンデュラム召喚》に必要な不可欠なものなの……?」

困惑した様子の2人を気にしてか、先程観戦していた入塾希望者の内何人かが近寄ってくる。柚子は、片手に自身の持つモンスターカード《幻奏の歌姫ソロ》を、もう片方の手にはペンデュラムカード、と呼ばれた《時読みの魔術師》を表面を見せられるように持つ。こうして比較すると、違いがよくわかる。

「それじゃあ、ペンデュラム召喚はこのカードじゃないとできないっ

てこと？それ、ズルじゃん！」

入塾希望者の1人が苛立たしげに言う。

「つか、ペンデュラム召喚なんて最初からないんじゃないやねえの？チツ、期待して損したぜ。」

1人、また1人と退出していく人々。

「そんなこととしてまで、チャンピオンに勝ちたかったのかしら？」

「やっぱり卑怯者の息子ね。帰りましょ。」

がらん。先程までぎゅうぎゅうに人がいたのに、今は、この塾の関係者のみを残すだけになっちゃった。

遊矢「っ……………」

遊矢は思わず、頭につけていたゴーグルを下ろす。

新しい1歩が踏み出せた。そんな矢先、大きく失敗し、更には過去の事を掘り返される始末。

もう嫌だ。逃げたい。そんな気持ちがあるの心の中いっぱい広がる。

???「遊矢さんはズルなんかしてない……卑怯者なんかじゃない！」

遊矢「えっ？」

タツヤ「ペンデュラム召喚だっちゃんとおあるんだ！」

柚子「あの子……。もしかして、前、ウチに見学に来てた。」

権現坂「そうだぞ。遊矢！お前は正々堂々戦い、チャンピオンに勝ったんだ！それに、ファン第1号を泣かせてどうする！」

アユ「昇お兄ちゃん!？」

フトシ「来ていたの!？」

遊矢「ファン第1号……………」

権現坂「あのエキシビジョンマッチの時、会場で観ていたそうさ。」  
タツヤ「っはい。凄かったです、ペンデュラム召喚！」

遊矢「うう……………」

純粹な、称賛の言葉。何よりも、彼が望んでいたもの。

権現坂「だから、頑張れ。ファンの為に！」

遊矢「……………おう！」

遊矢はゴーグル上げ、権現坂達の方を向く。その表情は、暗く後ろ

向きなものではなく、辛い事があつても前に進んでいく、そんな決意を込めた笑顔だった。

遊矢「柚子、権現坂。頼みがある。……特訓に付き合ってくれないか？」

権現坂「この男権現坂。友の頼みとあらば当然、了承する！」

柚子「まったく。いいわ、やりましょ。遊矢。」

それから夜中まで、俺はペンデュラム召喚の特訓をした。最後まで付き合ってくれた柚子と権現坂には感謝しかない。

そして、練習すること、271回目。遂に俺は、ペンデュラム召喚を成功させる事ができたんだ。

この時の俺は、何も気付いていなかった。いや気付こうとしなかった、か。なんで俺に、ペンデュラム召喚なんてものが出来るようになったのか。

なんで、ペンデュラム召喚が生まれたのかを。

## 第2話 おかしなおっかけ？融合玩具使いの弟子入り志願！

昨日はさんざんな一日だった。

“ペンデュラムカード”を見せて欲しい。いきなり、そう頼んで来たのはへ沢渡 シンゴ。口車に乗せられた俺は、LDSにてソイツとデュエルをすることになったんだけど、なんとそれは罠だった。デュエルをする前に俺の《時読みの魔術師》、《星読みの魔術師》を見せて欲しいと言ってきたから見せてあげたら、カードを沢渡に奪われてしまった。あげく、沢渡は、奪ったカードを使ってペンデュラム召喚を行ってきたんだ！

なんとか、時読みも星読みも奪い返してデュエルにも勝利することができたけど。往生際が悪い沢渡はいちやもんをつけてきて……塾の子供達を人質に“ペンデュラムカードを渡せ”と脅してきた。そして、

素良「おはよう！師匠！」

遊矢「……………なんでお前、俺の家に居るんだよ!？」

清々しい朝。今日も一日エンタメって頑張るぞ！そんな気持ちで俺は朝食へと向かう。が、そこで待っていたのは昨日俺達を沢渡らから助けてくれた子供、へ紫雲院 素良。<

……そして何故か俺に弟子入りを志願してきた奴だ。

素良「だって、僕は師匠の弟子だよ？師匠についていくのは当たり前じゃない！」

遊矢「だーかーら！弟子になんかしてないって！そもそも、家にまで来るのはどうなんだよ……。ちゃっかり朝ごはんまで食ってるし。」

洋子「いやー。私ってばお腹空いてそうな子を見ると、つい拾っちゃうのよね。」

母さん……。そんな犬猫を拾うみたいに子供を拾ったらマズいだろう……。

素良「まあ、いいじゃん。師匠のお姉さんのパンケーキ、すっごく美味しいし！」

洋子「えっ！お姉さん!？」

素良「あ、違ったんですか？ごめんなさい。若くて、美人だから僕てつきり……。」

なんか、母さんの周りにパアと花が咲いたような。母さん、なんでそんなベタな手に引つかかるんだよ。

洋子「若くて、美人……だなんてそんな！気に入ったんならもつとパンケーキ食べてもいいのよ！ホラ。」

遊矢「つて、母さんそれ俺の！」

素良「ありがとう、お姉さん！わーい、いっただきまーす。あ、メープルシロップありまふか？」

洋子「あるわよ。たっぷりかけていいからね〜」

口の中にホットケーキをいっぱいしながら、喋る素良。ご機嫌な母さんは冷蔵庫からメープルシロップの瓶を持ってきて、素良の分（元々俺の分）のホットケーキにかけていく。

………なんだろう。今日もさんざんな一日となる。そんな気がする。

遊矢「……で、学校にも、ココにも押しかけてくるとかホントなんなんだよお前！」

時はすでに放課後。学校も終わり、俺はいつも通りに塾へと来ていた。そこで待っていたのは。

素良「ふふん。師匠の行くところなら何処へだつてついていくよ？」

遊矢「だからっ！俺は！お前を弟子にした覚えは……。」

素良「だつてだつて！僕ビビつときちやっただもん。師匠のデュエルに！ペンデュラム召喚凄いやね〜。モンスターがドババツと出てくるんだもん！僕もやってみたいなあ。」

遊矢「いや、ペンデュラムカードがないとできないし……。」

素良「なら、僕とデュエルしようよ！」

遊矢「ええ……。」

この自称弟子は、今日1日、俺についてきている。家だろうが、学校だろうが、授業中だろうが、トイレだろうが、そして塾だろうが、ずっとだ。なんでそこまでして俺の弟子になる事に固執しているのかと思っていたが、なるほど。ペンデュラム召喚に興味があるのか。……まあ、予想通りではあるんだが。

でも、正直昨日の件があるからデュエルをするのは断りたいところなんだよな。そんな俺の煮え切らない反応を見てか。

素良「師匠……。僕と、デュエルしてくれないの？」

上目遣い。うるうるとした瞳で俺を見つめ。声はちよつと高くなり。

タツヤ「ちよつとくらいなら、いいんじゃないかな……。」

アユ「かわいそうだよ……遊矢お兄ちゃん。」

フトシ「そうだけ、デュエルしてあげようよ。」

柚子「そうよ。1回くらい、してあげてもいいんじゃない？」

修造「遊矢！俺は、お前を挑まれたデュエルから逃げるようなデュエリストに指導した覚えはないぞ！」

素良「師匠く。僕と、デュエルく。」

うう。皆、素良の味方をしている。ど……どうすれば良いんだこの状況。

遊矢「そ、そんな目で見たってダメなものは、ダ……。」

素良「……………ジー。(素良はキラキラとした目で 遊矢を見つめている！)」

ああ！もう！小さい子にこんな目で見られたら断れないよ！

遊矢「わかった……。デュエルしてやるよ。」

素良「ホント？やったあ！」

遊矢「ただし！俺が勝つたら、もうこれ以上俺の周りをうるちよろするなよ！あと師匠って呼ぶのも無し！弟子入りも無し！」

素良「じゃあ、僕が勝つたら弟子入りして、師匠って呼んで、周りをうるちよろしてもいいんだね？」

わーい、頑張つて勝つぞお！と言いながらも、塾の子供達に連れられてデュエル場へ向かう素良。対する俺は心なしかおもい足を引きずり、彼らの後を追うのだった。

ペンデュラム召喚。始めは、俺の……俺だけの力だと思っていた。けれど、それは大きな間違いで。

ペンデュラムカードさえあれば、誰だってペンデュラム召喚はできるのだ。昨日の奴、沢渡だって俺から奪ったカードで、ペンデュラム召喚をしてきた。

俺だけの、特別な力。まるで漫画の主人公みたいだと思った。浮かれていた。

今、ペンデュラムカードを持つのは俺一人。だけど、他にもペンデュラムカードを持つ奴が表れたら？そう思うと………。なんか、嫌だな。

ー

修造『2人とも！準備は、いいな？アクション・フィールド、オン！フィールド魔法《スウィーツ・アイランド》！』

素良「わああ！お菓子の国だ！僕こういうの大好き！おじさん、ありがとう！」

修造『かわいい！』

素良「僕、アクションデュエルするの初めてなんだよね。楽しみだなく。」

今回のフィールドは、ビスケットで造られた建物、チョコレート池、キャンディの木などが存在し。まさにお菓子の国。

柚子「戦いの殿堂に集いしデュエリスト達が。」

タツヤ「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い。」

フトシ「フィールド内を駆け巡る！」

アユ「見よ！これぞデュエルの最強進化形！」

遊矢「アクション！」

素良&遊矢「デュエル！」

素良 LP4000 vs 遊矢 LP4000

素良「先行はもうよ、師匠！僕のターン。僕は手札から《フアーニマル・ドック》を召喚。」

フアーニマル・ドック ATK1700

柚子&アユ「ワンちゃんだ！はう。かわいい。」

素良の場に現れたのは、小さな天使の翼をもつ犬のぬいぐるみ。ワン！と鳴き尻尾をパタパタと振りつつ、フィールド内を走り回る。

素良「《フアーニマル・ドック》の効果、デッキから好きな《フアーニマル》モンスター1体を手札に加える。僕は、《フアーニマル・ベアー》を手札に加えるよ。先攻は攻撃できないからね。カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

遊矢「俺のターン、ドロロー！いきなり攻撃力1700か……。」

俺の《EM》モンスター達は、互いに互いを応援して、強くなるんだ。そのためか単体の攻撃力が低いモンスターが多い。

遊矢「でも、後ろ向きの姿勢じゃ、できることもできない！俺は、《EMハイタイガー》を召喚。」

EMハイタイガー ATK1700

一応、相打ちまでは狙える攻撃力。けれど、ここでモンスターを失う訳にはいかない。だから、俺は召喚と同時に走り始める。目当てのものももう見つけてある！

遊矢「アクション・カードゲット！……うん。このカードなら！バトル、《EMハイタイガー》、《フアーニマル・ドック》に攻撃！さらに、アクション・マジック《キャンディ・シャワー》を発動！」

アクション・マジックをディスクにセット。すると、どこからともなく雨が降ってくる。ただ、落ちてくるのは雨粒ではなく、キャンディー。飴の雨だ。

素良「!!わあ。キャンディーだあ！……って、僕のモンスターが!? 何食べてるんだよ〜！」

ドック ATK1700↓DEF1000

遊矢「《キャンディ・シャワー》は相手モンスター1体を守備表示にできる！」

素良「なるほどね〜。そうやってカードを見つけて、有利な状況を

つくっていくんだ。」

遊矢「《EMハイタイガー》の効果。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、デッキから《EM》モンスター1体を手札に加える！カードを1枚伏せて、ターンエンドだ。」

EMパートナーガを選択

素良「僕のターン、ドロー……！このカードが来たかあ。僕は永続魔法《トイポット》を発動。で、効果を発動するよ！これ、いいらないと。」

エッジインプ・シザーを墓地へ

素良の背後に巨大な、カプセルトイが現れる。素良が手札を1枚墓地に送ると、ガコンと音をたてカプセルが1つ、取り口に落ちてくる。

素良「《トイポット》は、1ターンに1度手札を1枚捨ててデッキから1枚ドローできる。何が出るのかな？ドロー……出ました！《ファーニマル・ライオ》！《トイポット》のさらなる効果。ドローしたカードが《ファーニマル》モンスターだった場合手札からモンスター1体を特殊召喚できる！そして、僕は手札から《ファーニマル・ベア》を召喚。」

ファーニマル・ライオ ATK1600

ファーニマル・ベア ATK1200

現れたのはこれまた可愛らしい、ライオンのぬいぐるみに、クマのぬいぐるみ。がおー、と鳴くその姿は天使のような愛くるしさ。

素良「よし。僕もアクション・カードを取るぞ……あつた、いくよ！」

彼の背丈よりも高い位置にあるアクション・カードを取ろうと、モンスターに支えてもらいながら背伸びをする素良。うーん、うーんと唸りながらも懸命に手を伸ばすその姿は、なんというか、微笑ましい。……ってこれ俺の今後の平和な生活がかかっているデュエル！むう。だけど素良にはアクションデュエルのルールを1つ教えないと。これで勝っても嬉しくないしな。それに俺の目指す、父さんのエンタメデュエルに程遠いし。

遊矢「素良。アクションデュエルでは、自分のターンに1分以上

カードを使わないと反則負けになるから、気をつけて。」

素良「そーなの!? うーん、仕方ないや。なら僕は《ファイニマル・ライオ》で《EMヘイタイガー》に攻撃!」

遊矢「っ! 攻撃力の低いモンスターで攻撃!?!」

素良「甘いよ、師匠。《ファイニマル・ライオ》の効果! このカードが攻撃する時、バトルフェイズ終了時まで攻撃力が500、アツプする! やっちゃえ、《ファイニマル・ライオ》!」

ライオ ATK1600↓2100

遊矢「うわあ!」

遊矢 LP4000↓3600

素良「さあ、《ファイニマル・ベア》。師匠にダイレクトアタックだ!」

遊矢「永続罨! 《EMピンチヘルパー》! 来い、《EMデイスカバー・ヒツポ》!」

EMデイスカバー・ヒツポ ATK800

開かれた罨カードからピーツ、と笛の音が響く。俺はデッキから1枚のカードを選び、ディスクにセットする。呼び出すのは、アクション・カード探しの頼れる相棒、ヒツポだ。ポンッ! ヒツポが俺のフィールドに現れる。そして俺はヒツポに飛び乗り、フィールド内を駆けていく!

素良「でもでも! 攻撃力が足りてないよ? 《ファイニマル・ベア》、そのまま攻撃だ!」

遊矢「《EMピンチヘルパー》は、相手の直接攻撃宣言時にその攻撃を無効にし、デッキから《EM》モンスター1体を効果を無効にして特殊召喚できる! ローリング・ヒツポ!」

いくぞ、ヒツポ! と声をかける。ヒツポは全速力のまま少し重心を傾けて……鮮やかに1回転! 横へと移動する。少し遅れてベアの攻撃が空を切る。

素良「避けるなんてずるーい! ぶー。僕はターンエンドだよ」

ライオ ATK2100↓1600

遊矢「さあ、俺のターン、の前に!」

先程、素良が見つけたアクション・カードへと向かう。ヒツポは軽々と跳び、俺はアクション・カードへと手を伸ばし、取る。

遊矢「アクション・カードゲット！」

素良「ああ！それ僕が見つけたのに〜！」

遊矢「ふふん。これがアクションデュエルさ！ドロー！……つと。さて、皆さんお待ちかねのをいきますか。」

ヒツポを停止させて、俺は観客達の方を向く。

大きく両手を広げて。さあ、ショーの始まりだ！

遊矢「レディースアンドジェントルメン！お楽しみは、これからだ！俺はスケール1の《星読みの魔術師》とスケール8の《時読みの魔術師》でペンデュラムスケールをセッティング！これで、レベル2から7までのモンスターが同時に召喚可能！」

素良「あ、もしかして！」

フトシ「キタキタ！」

タツヤ「ペンデュラム召喚だ！」

遊矢「揺れろ、魂のペンデュラム！天空に描け光のアーク！ペンデュラム召喚！現われろ、俺のモンスター達！《EMソード・フィッシュ》、《EM・パートナーガ》。そして、雄々しくも美しく輝く二色の眼！《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》！」

EMソード・フィッシュ ATK600

EMパートナーガ ATK500

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK2500

素良「すっごい！……凄いよ師匠！」

時と、空間の魔術師達が光の柱に包まれて俺の場に現れる。掛け声と共に大きなペンデュラムが揺れて。天空に穴が開き、そこからモンスター達が現れる。……よし、いくぞー！

遊矢「《EMソード・フィッシュ》の効果。相手モンスターの攻撃力・守備力ダウンだ！そして、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を対象に《EM・パートナーガ》の効果。自分フィールドに存在する《EM》モンスターの数×300、攻撃力アップ！」

ライオ ATK1600↓1000

ベア ATK1200↓600

オツP ATK2500↓3400

素良「攻撃力3400!」

遊矢「まだまだ!俺はアクション・マジック《キャンディ・コート》を発動!このターン、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は相手の魔法・罠カードの対象にはならず、戦闘では破壊されない!さあバトルだ!」

時読みの効果で、素良はオッドアイズのバトル中、罠を発動できない。しかもアクション・カードで効果の対象にもできなくした、まさに必殺の一撃。

素良「罠発動、《威嚇する咆哮》!師匠?これで攻撃は行えないよ!」

遊矢「なんだって!?!……俺は、これでターンエンド。」  
だが、それを難なくやり過ごしてくる。

素良「《時読みの魔術師》の効果、凄いやね!時を遡って罠発動をなかつた事にしちゃうんだもん!だからね。その辺りの対策は、ちゃんとしてるよ?」

遊矢「くっ……。」

素良「さ、僕のターン。ドロロー。やっぱり面白い!ババアと出てズガンと決めてくる!ペンデュラムモンスター最高!」

余裕の雰囲気を見せる素良。

遊矢「けど、俺の《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の攻撃力は3400!そう簡単には超えられないぞ!」

素良「そうだね。でも……僕のデッキも本気を出したがってるみたいだ。僕は墓地に存在する《エッジインプ・シザー》の効果発動!手札を1枚デッキの1番上に戻して、墓地から特殊召喚!」

エッジインプ・シザー DEF800

現れたのは、幾つかハサミを組み合わせたようなモンスター。今まで出てきたぬいぐるみのようなモンスター達とは違い、不気味で、悪魔みたいなモンスターだ。

素良「《トイポット》の効果!」

遊矢「っ!デッキの1番上は……」

素良「もちろん、さつき僕が《エッジインプ・シザー》の効果で置いたもの！さ、1枚捨ててドロロー！引いたカードは《ファーニマル・オウル》。そのまま特殊召喚！」

ファーニマル・ウイングを墓地へ

ファーニマル・オウル ATK1000

カードを1枚、啞えたぬいぐるみのフクロウ。素良の手元へと啞えたカードを持っていく。

素良「《ファーニマル・オウル》の効果！デッキから《融合》を1枚、手札に加えるよ。そのまま、僕は魔法カード《融合》を発動！」

遊矢「融合だと!？」

フトシ「何だよ？融合って。」

タツヤ「モンスターとモンスターを合体させて、より強力なモンスターをエクストラデッキから呼び出すんだ！」

素良「僕が融合するのは《エッジインプ・シザー》と《ファーニマル・ベア》。悪魔の爪よ！野獣の牙よ！今一つとなりて新たな力と姿を見せよ！融合召喚！現れ出ちやえ、すべてを切り裂く戦慄のケダモノ、《デストロイ・シザー・ベア》！」

デストロイ・シザー・ベア ATK2200

クマのぬいぐるみの腹がちぎれる。胴体が2つに割れ、その中から大きなハサミが現れ。腕がモゾモゾと動き、内部から破裂する。そこから飛び出してくるのは、ハサミの刃とその先端についた大きなクマの手。頭も、口の部分が裂け、その中で怪しげに光る目がこちらを見据える。

アユ「ひい！柚子お姉ちゃん、怖い！」

柚子「大丈夫よ！アユちゃん。……あれが、融合モンスター。」

修造「融合召喚。最近、LDSで教えるようになったと聞いていたが……。もしかして、LDSの生徒なのか!？」

素良「まだまだいくよ。僕は墓地の《ファーニマル・ウイング》の効果！墓地にある《ファーニマル・ベア》とこのカードを除外して、1枚ドロロー。さらに自分フィールドの《トイポット》を墓地に送ってもう1枚ドロロー。さらにさらに！墓地に送られた《トイポット》の効果

でもう1枚の《エッジインプ・シザー》を手札に加えるよ！」

遊矢「使ったはずの手札が、もう回復した!？」

素良「おっ!また引いちやった!手札から《融合》発動。フィールドの《ファーニマル・オウル》と手札の《エッジインプ・シザー》で融合召喚!《デストロイ・デアデビル》!」

デストロイ・デアデビル ATK3000

アユ「うあああん!」

タツヤ「ひい!」

フトシ「これは……ちよつとしびれられないぜ…。」

さらに現れたのは、まさに悪魔といえるモンスター。巨大な、悪魔のぬいぐるみだ。

素良「さあ、師匠。これから僕の本気、たっぷり見せてあげるよ。」  
迂闊だった。前のターンで決められる!そう思ってたモンスターを全て、攻撃表示で出してしまった。それが今、俺を追い詰めている。

遊矢「っ!ヒッポ!アクション・カードを探すぞ!」

素良「いかせないよー?まずはちよこまかと動き回るそのカバから降りてもらうよ!《デストロイ・デアデビル》、《EMディスプレイ・ヒッポ》に攻撃だ!」

遊矢「うわあああ!っ、《EMピンチヘルパー》の効果!このカードを墓地に送って戦闘ダメージを0にする!」

素良「なら、僕は《デストロイ・デアデビル》の効果を発動するよ。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に10000のダメージを与える!」

遊矢「そんな!?!つううう!」

遊矢LP3600↓2600

アクション・カードを探そうとするも、その前に攻撃され、ヒッポを失う。さらに起こった追加ダメージによって、俺は飛ばされて、チョコレートの池へとダイブしてしまう。

素良「続けていくよ!《デストロイ・シザー・ベアー》で《EMソード・フィッシュ》を攻撃!」

遊矢「くうつつ!ハア…ハア…。」

遊矢LP2600↓1000

素良「《アストロイ・シザー・ベアー》の効果、発動しちゃうよ？破壊したモンスターを装備して、攻撃力を1000アップ！」

シザー・ベアー ATK2200↓3200

フトシ「さらに大きくなった!？」

攻撃され、ボロボロとなったソード・フィッシュを掴むシザー・ベアー。そのまま口へと持っていきバクン!とソード・フィッシュを噛み砕く。そして、シザー・ベアーが巨大化していく。

素良「さあラストだ!《フアーニマル・ライオ》で《EMパートナーガ》に……。」

遊矢「《EMパートナーガ》のもう1つの効果!このカードがフィールドに存在する限り、レベル5以下のモンスターは攻撃できない!」  
素良「そつかあ。それならカードを2枚伏せて、ターンエンド。あれあれ?師匠。さっきまでの余裕は、どうしたの?」

修造「モンスターを破壊すると大ダメージを与えるモンスターに、モンスターを破壊すればするほど強くなるモンスター……。」

柚子「これが融合召喚の力……。」

……良かった。まだオッドアイズは残っている。オッドアイズさえいれば、この状況をひっくり返せる!

遊矢「俺のターン、ドロー!いくぞ、オッドアイズ!」

俺はオッドアイズに乗る。ライオを攻撃すれば終わるが、素良の場には伏せカードが2枚もある。……さっきの攻撃をかわした素良の事だ。何か、ある。それなら万全を期すために、アクション・カードを取りに行くしかない!

アユ「でも遊矢お兄ちゃんの場合にはまだオッドアイズが残ってるよ!」

タツヤ「そうだ!ライオを攻撃すればライフを削り切れる!」

素良「やつぱり、アクション・カードを取りに行くよね。師匠、僕と追いかけてこだ!」

遊矢「何!？」

素良は、シザー・ベアーの手へと跳び乗る。そしてシザー・ベアー

は素良を投げ飛ばし。素良は凄いい勢いでこちらの方に向かってくる。そして俺を追い抜き……狙っていたアクション・カードを先に取られてしまう。

素良「やつだなあ、師匠つてば。そんな怖い顔しちゃつて。」

遊矢「……俺は《EMパートナーガ》を守備表示に変更。」

EMパートナーガ DEF2100

素良「あれあれ？師匠つてば消極的だね。」

遊矢「バトル！《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》で《ファーマル・ライオ》に攻撃！」

素良「アクション・マジック《ダメージ・バニッシュ》。僕の戦闘ダメージを0にするね。」

遊矢「!!俺はカードを1枚伏せて、ターンエンド……。」

素良「もう終わりなの？ガツカリだなあ。師匠とはもつと面白いデュエルができると思つてたのに。つまんないの。」

遊矢「くっ……。」

これも、通らない。急いで、アクション・カードを探さないと……

!

素良「僕のターン、ドロ。さあ行くよ？《デストーイ・デアデビル》で《EMパートナーガ》に攻撃！」

遊矢「カウンター罠！《攻撃の無力化》、これで攻撃は無効だ！」

素良「こつちもカウンター罠！《デストーイ・マーチ》。《デストーイ》モンスターを対象とするカードの発動を無効にして、破壊する！バトルは続行！いけ、《デストーイ・デアデビル》！」

俺にアクション・カードを探す暇を与えず、素良は攻撃を仕掛けてくる。シザー・ベアーの攻撃に備えたかったカードを発動させざるを得ない。だが、また無効にされてしまう……。

素良「さあ、《デストーイ・デアデビル》の効果ダメージで終わりだよ！」

遊矢「まだまだ！手札の《EMレインゴート》の効果！俺の受ける効果ダメージを0にする！」

デアデビルの攻撃の余波が俺にまでとどいてくる。この効果ダ

メージを喰らえばライフは尽きる。俺は大きな水色のレインコートでこれを防ぐ。目の前が真っ暗になり。攻撃が終わり、レインゴートの効果も切れ。

俺が再びフィールドを認識した時には、素良は既に別の場所へと移動をしていた。

アユ「す…凄い。」

修造「なんて身のこなしだ！あの子何処の塾出身だ？」

素良「ラッキー！アクション・カード見つけ。……これで決まっちゃうかな？《デストーイ・シザー・ベアー》で《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》を攻撃！アクション・マジック《ハイダイブ》！《デストーイ・シザー・ベアー》の攻撃力を上げちゃう！」

シザー・ベアー ATK3200↓4200

遊矢「!!間に合わない……うわあああ!!」

遊矢LP1000↓200

ギリギリの所で俺はアクション・カードを見つける。が時、既に遅く。オッドアイズを向かわせようとする矢先、パワーアップしたシザー・ベアーの攻撃が直撃する。オッドアイズに乗っていた俺は弾き飛ばされ、オッドアイズはジュースの川へと勢いよく叩きつけられる。

遊矢「オッドアイズ！……オッドアイズが。俺の、オッドアイズが……。」

素良「さらに、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》も装備するよ。」

無慈悲に響く素良の声。

柚子「オッドアイズは、遊矢が勇氣ある1歩を踏み出した証。遊矢が生み出したペンデュラム召喚の象徴……。」

柚子の言う通りだ。俺は……俺は、どうすれば。涙を隠すためにゴーグルをかけて、ゆらゆらと揺れる振り子を握りしめて。もう、無理だ。だって、

子供遊矢『どこいっちゃったんだよ……。』

遊勝『どうした、遊矢?』

子供遊矢『父さん!ペンデュラムが……ペンデュラムがなくなっちゃったんだ!ううう……。』

遊勝『そうか。そいつは、困ったな。けどな、遊矢。だからといって俯いてばかりいても、良い事なんて1つもないぞ。さあ、顔をあげて。』

子供遊矢『でも……。でも……!』

遊勝『つらい時や、泣きたい時ほど顔をあげて笑うんだ。そうすれば、きつと前に進める。』

違う。泣きたい時は笑え。そうだったよな、父さん。

……顔をあげて、大きな声で。

遊矢「アーツハツハツハ!」

そうだ!心まで守備表示になっていたら楽しいデュエルなんかできるはずがない!俺のモットーは、明るく、楽しく、エンタメるデュエル。俺が楽しくないデュエルで、人を楽しませることなんかできない!!

ー振り子が輝く。そして、ー

遊矢「デュエルディスクが、反応してる?なんだ?」

ディスクの画面に変化が現れているのに気付く。そこは、エクストラデッキ。俺のデッキにエクストラデッキのカードは入っていないはず。じゃあ、これは?

素良「……あれー?なんで装備されないんだ?」

遊矢「破壊された、《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》は墓地にはいない。」

素良「え?」

遊矢「破壊された、ペンデュラムモンスターは、エクストラデッキの中だ!」

タツヤ「ええっ!」

アユ「いつの間に!」

柚子「いつ、移動したの!」

素良「……………つ！エクストラデッキの中？面白いよ、師匠！破壊されたペンデュラムモンスターは墓地にはいかずにエクストラデッキにいくんだ！そんなモンスター見るの、僕初めてだよ！最高。ホント最高だよ、ペンデュラムモンスター!!」

興奮した様子の素良。最初に出会った時、先程までの周りをちよこつと欺いていた時の様子ではなく、心の底から面白い！と。本心で言っている、俺はそう感じた。

素良「攻撃はこれでお終い。僕はこれでターンエンド。師匠！次のターン、楽しませてよね！」

遊矢「もちろん！今度こそ、お楽しみはこれからだ！俺の、ターン！ドローツ！」

先程拾いそびれたアクション・カードを拾いつつ。周りよりも高い位置へと移動する。その場をステージに見立てて。

遊矢「さあさあ皆様、ご覧ください！私のフィールドのモンスターは、ゼロ！けれども、私の舞台にはペンデュラムスケールがセツティングされております！」

皆「ペンデュラム！ペンデュラム！」

遊矢「ペンデュラム召喚！手札から、《EMチアモール》、《EMドラミング・コング》！そして、エクストラデッキより、輝きと共によみがえれ！《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》、《EMパートナーガ》！」

EMチアモール DEF1000

EMドラミング・コング DEF900

EMパートナーガ DEF2100

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK2500

フトシ「ペンデュラムモンスターってエクストラデッキからも召喚できるんだ！しびれるう〜！」

柚子「破壊されても墓地へはいかず、エクストラデッキから何度でもよみがえる。これがペンデュラムモンスターのもう1つの力だね！」

修造「凄いぞ、遊矢！熱いぞ、ペンデュラムモンスター！燃えるぞ、

熱血だああ！」

遊矢「《EMパートナーガ》の効果を発動させます！私の場に存在する《EM》モンスターは3体。よって《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の攻撃力を900、アップです！」

オツP ATK2500↓ATK3400

素良「これで、僕の場のモンスターの攻撃力を超えた。けど！その攻撃力じゃあ、僕のライフは残る。」

遊矢「それはどうか？ここで、《EMチアモール》の効果発動。1ターンに1度、元々の攻撃力よりも高い攻撃力を持つモンスター1体を選択してそのモンスターの攻撃力を1000アップさせます！皆さん、《EMチアモール》の可愛らしい応援、ご注目ください！」

素良「っ！」

遊矢「さらに！先程手に入れましたアクション・マジック《ナナナ》を発動いたします！エンタメの味方ナナナ！俺に力を貸してください！このカードは自分フィールドのモンスター1体の攻撃力を700アップ！」

オツP ATK3400↓4400↓5100

素良「!!アクション・カード………あつた！アクション・マジック《奇跡》！僕は《デストーイ・デアデビル》を選択！これでまだ大丈夫……！」

遊矢「いいや！バトル！《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》、《デストーイ・シザー・ベア》に攻撃。螺旋のストライクバースト！この時、《EMドラミング・ゴング》の効果発動！1ターンに1度、相手モンスターと戦闘をおこなうモンスターの攻撃力をバトルフェイズ終了時までアップさせる！」

オツP ATK5100↓5700

素良「くっ！《星読みの魔術師》と《時読みの魔術師》の効果で僕は魔法・罠カードを発動できない……。」

遊矢「さて皆さん、ここで簡単な算数のクイズです。5700引く

3200は?」

アユ&フトシ&タツヤ「「2500!」」

遊矢「そして……」

柚子「《オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン》の効果で、」

修造「相手に与えるダメージは、2倍だあ!」

遊矢「その通り!それでは、皆さんご一緒に!」

「リアクション・フォース!!」

素良「うああああ!!」

素良LP4000↓0

遊矢WIN!

タツヤ「やった!」

フトシ「遊矢兄ちゃんの勝ちだ!」

アユ「すてき!」

柚子「はあ……」

「……」

デュエルが終了し、アクションフィールドが解除される。俺は放心状態?の素良へと近づく。

遊矢「約束、覚えてるよな?俺が勝ったから、弟子にはできな……」

素良「……ふふっ!面白い!すっごい楽しかったよ、遊矢とのデュ

エル!」

遊矢「……へ?ってなんで呼び捨て。」

素良「弟子にはしてくれないんでしょ?だったら僕、遊矢と友達になる!友達なら呼び捨てでいいよね?」

遊矢「え?勝手に何言ってるんだ!」

修造「そーかそうか。2人は友達になったのか。塾生の友達は皆、塾生。どうだ君、我が遊勝塾へ入らんか。」

素良「いいよ!僕、LDSに入ろう思ってたけど、こっちの方がずっと面白そうだし!」

修造「よし。それじゃ早速、申し込み書を持ってくるからな!」

柚子「お父さん、いきなり……」

塾長がすかさず勧誘をかける。そして満面の笑みを浮かべ、即答す

る素良。こつちの方が面白い、か。

遊矢「そうだ。お前どこで融合召喚を覚えたんだ？」

素良「えっ。僕の周り皆、普通にやっていたよ？」

遊矢「普通にやっていた!? 何処だよそれ。外国とかか？」

素良「いーじゃん。そんな細かい事。僕と遊矢は友達なんだからさ。」

遊矢「俺はまだお前を友達だとは……。」

素良「よろしく！遊矢。」

遊矢「だーかーら！またお前は勝手に！」

でも、悪い奴じゃなさそうだ。……これから、よろしくな。素良。心の中で、そんな事を思いながら。

こうして、「遊勝塾」に新たなメンバー、融合使いの（紫雲院 素良）  
が加わった。さらに賑やかになる「遊勝塾」で、エンタメデュエルを  
磨いていく。そして、いつか必ず、父さんみたいなデュエリストにな  
る！そんな決心を再度確認して、平和な俺の日常は続いていく。  
その、はずだった。戦争の魔の手は、すぐ側まで迫っていて。